

# 「クードルン」試訳(Ⅱ)

丑 田 弘 忍

## 第 五 歌 章

——ウァテがイルラントに赴いたこと——

テネラント（デンマーク）に一人の勇士（ヘテレ）が育った。確かなことだが，辺境のステュルメンに彼の縁者が住んでいた。彼らは彼を養れにかなりように養育した。ノルトランドの地も彼のものであった。彼はまさしく権勢高く高貴であった。（204）

彼の縁者の一人が，その者はウァテと呼ばれていた，城と領地を賜わっていた。ウァテはヘテレの縁者であったが故，ヘテレを熱心に養育した。彼はヘテレにあらゆる徳を教えこみ，守っていた。（205）

テネマルケ（デンマーク）ではウァテの姉の子が領主であった，それは勇猛なるホーラントであった。彼はヘテレ王のために尽した。それがためヘテレ王は彼に王冠をいだかしめたのだ。彼はこの勇者に王冠をふさわしい報酬として与えた。（206）

権勢高きヘテレはノルトランドから遠からぬヘゲリンゲンに住んでいた。あなたがたに語ろう，そこで彼はおよそ八十あるいはそれ以上の城を有していたことを。これらを守っていた城代は日々大いなる養れをもって彼に仕えた。（207）

ヘテレは海と陸を支配するフリエセン（フリースラント）の王であった。ディエトメルス（ディトマルシエン，北海沿岸）とウァーレリス（イギリスの Wales?）の地も彼の領地であった。ヘテレは権勢高く，彼には

多くの縁者がいた。彼は寧猛果敢であって、しばしば敵を待伏した。(208)

ヘテレの両親はすでにこの世を去っていた。それ故妻をめとることが必要となった。父と母は彼に領地を残して逝った。彼には多くの縁者があったが、彼らの許で暮らすことはつまらぬことであったにちがいない。(209)

貴族たちは彼に勧めた、彼にふさわしい妻をめとるようにと。そこで若き勇士は答えた、「このヘゲリングンでみやびやかにて、わが城へ連れてこれるほどの婦人をわしは知らない」。(210)

そこでニーフランド（リヴォニア、バルト海沿岸の現在のラトヴィアとエストニア地方）の若きモールンクが語った、「聞くところによれば、この世でみやびやかに暮している一人の婦人を私は知っております。彼女が殿の妻になるよう、我々は尽力を尽しましょう」。(211)

ヘテレは尋ねた、その人は誰であり、何という名前であるかと。彼は語った、「彼女はヒルデと申し、イルランドの人です。彼女の父はハゲネと言い、ゲールの族の者です。彼女がこの地に来れば、殿は大層お喜びになるでしょう」。(212)

そこでヘテレ王は言った、「今や噂されている、誰が彼女をめとるか彼女の父の悩みの種であると、そして彼のために多くの高貴な男たちが死したと。わしはいかなる友をも死なすまい」。(213)

そこで再びモールンクが語った、「ハゲネの国へ人を遣って下さい。ホーランドに参じるよう命じて下さい。あの者はハゲネの振舞を見てまいり、それをよく知っております。あの者の助なしでは事は決して成就しないでしょう」。(214)

ヘテレは言った、「彼女がたいそう美しいとそなたが言うが故に、そなたの言う事に従おう。彼女を連れてまいる時には、そなたも居合せねばならぬ、わしはそなたに当然ながら全幅の信頼を置いているから。彼女がへ

ゲリンゲンの王妃になれば、そなたは益々誉れを得よう」。(215)

こうして、ヘテレの縁者ホーラントのいるテネラントに使者を送るよう彼は命じた。彼はホーラントに伝えさせた、自分につくす気持があれば、一週間以内に自分の許に参じるようにと。(216)

使者達がやって来て、ホーラントがその趣きを聞いた時、命ぜられた事を喜んで完遂せんとするほどに、彼はヘテレに忠義心を抱いていた。それ故後に彼は辛苦と大なる艱難に会った。(217)

ホーラントは60名の家来共とただちに宮廷へ向かって出発した。この勇士が国許にて別れの挨拶をした後、出来る限り早く急いだ、何によって主君に誉れ高く仕えることが出来るかを知らんがために。(218)

七日目の朝彼はかの地に到着した。彼とその郎党は立派な衣裳を身につけていた。王は屈強な武士共を出迎えた。ホーラントの傍にテネマルケの勇ましいフルオテがいるのを王は見た。(219)

彼らがやって来たことは、王にとって喜ばしいことであった。彼は喜んで彼らを打ち見た。彼らが来たことにより、彼が心にいだいていた悩みの一端がとれた。彼はほほえみながら言った、「ようこそフルオテよ」。(220)

フルオテとホーラントは王の前へ進み出た。王は尋ねた、国のテネラントは如何様であるかと。そこで彼ら両名は言った、「数日の間に、我々は激しい戦いで多くの手痛い傷を与えました」。(221)

彼らが戦いのためにどこへ赴いたのかと、彼は尋ねた。彼らは言った、「我々はポルティガール(デンマークと国境を接している国)で戦いました。そこの権勢高き王は戦いを断念しませんでした。彼は連日国境で我々に損害を与えました」。(222)

そこで若きヘテレは言った、「事態を重く見なくてもよい。まことにわしは思うのだが、老ウァテが守っているステュルメンの国境を彼は放棄し

はすまい。あの者から城をとりあげることは誰も出来まい」。(223)

勇士たちは腰を下すために広い客殿に赴いた。そのあとでホーラントとフルオテは若者らしく、あてなる婦人のミンネについて語り始めた。王は喜んでそれを聞いた。それで彼は彼らにすばらしい褒美を与えた。(224)

そこでヘテレはホーラントに頼んだ、「若き王女ヒルデがどのような女<sup>い</sup>人か、そなたが知っているなら話してほしい。わしは使を送ってあの女人への奉仕を知らせよう」。(225)

そこで勇猛なる武士ホーラントは言った、「わたしは多くの事を知っております。勇猛なハガネの娘、イルラントのヒルデ様より美しい乙女をわたしは存じません。誉れ高い王冠はあの方にふさわしいことでしょう」。(226)

ヘテレはそこで尋ねた、「彼女の父が美しい娘をわしにやると、言うであらうか？ 彼がわしをたのもしい者と見做すならば、わしは彼女を愛し、また彼女をめとることを手伝ってくれた者に絶えず褒美をとらせよう」。(227)

「そうする事は大層難しい事です」とホーラントが言った、「使者としてはハゲネの国へは誰もまいりません。それを私もあわててしようとは思いません。そこへ遣わされる者は、そこで打ち殺されるか、縛首にされます」。(228)

そこで再びヘテレは語った、「わしは彼女をぜひ娶りたい。イーリーヒェ（アイルランド）の王ハゲネがわたしの使者を縛首にするならば、彼も死を被ろう。彼がどんなに勇ましくとも、彼の陰しい心は滅びよう」。(229)

そこで勇士フルオテは言った、「もしウァテがイルラントに向う殿の使者であることを望むならば、うまく行くでしょうし、我々は殿の許へかの婦人を連れてまいるでしょう、そうでなければ、我々は心の痛みに傷つく

ことでしょう」。(230)

王ヘテレは語った、「ステュルメンに人を送ろう。ウァテはわしが命じるところ、どこなりとも赴くものとわしは信じておる。またフリエセンのイーロルトとその家来にも、わしの許へ参るよう命じるがよい」。(231)

使者どもはステュルメンの地へ急ぎ赴いた。そこで勇士どもの間で勇敢なるウァテの姿が見られた。ヘテレ王のところへ赴くよう、王の命令が彼に伝えられた。ヘゲリングエンの王ヘテレがウァテに何を求めているのか、彼には不思議であった。(232)

ウァテは尋ねた、兜か、胸あて、それに手勢を引き連れて参じるべきかと。そこで使者の一人が言った、「王がそなたとの見参を望んでおられる以外に、武士どもを必要としておられるかを、私は聞いておりません」。

(233)

ウァテは出発せんとした。家来たちを彼は国と城とに残した。彼が馬に乗った時、十二人の家来の外に誰も従わなかった。勇敢なるウァテは宮廷へ急いだ。(234)

彼はヘゲリングエンへ到着した。そこで彼はカンパティレ（ヘテレの城）へ駒を進めた。それは勇士ヘテレに喜ばしいことであった。ヘテレはウァテを出迎えようとした。彼は思った、旧友ウァテをいかにして迎えたらいいものかと。(235)

ヘテレは喜んでウァテに挨拶をした。王は声高に言った、「ウァテ殿、ようこそ。わしらが一緒に暮し、敵に対する戦いを企てて以来、そなたに会うこと久しい」。(236)

ウァテは彼に答えた、「友どうしが一緒にいるのはよいものでしょう。その時には彼らは強敵に対してそれだけ一層成功を収めるでしょう」。ウァテは王の手を懇に握った。(237)

彼ら二人は腰を下ろした、ほかには誰もいなかった。王は権勢高かった。ウァテは気高く、又なにかにつけ誇り高かった。ヘテレは思いめぐらした、ウァテをいかにしてイルラントへ送るべきかと。(238)

そこで若き勇士ヘテレは言った、「わしはそなたの許へ使者を送った。わしは勇猛なハゲネの国への使を必要としている。ウァテよ、友よ、そなたよりそれに適した者をわしは知らない。うまく使をはたしてほしい」。

(239)

そこで老ウァテは言った、「私が殿のためにせねばならぬ事を喜んでいたしましょう。それ故、私を信頼して下さい。殿の思い通りに決着をつけましょう、私が死んで出来ないこと以外には」。(240)

ヘテレは語った、「剛勇なハゲネが美しい娘をわしにくれて、彼女がわしの国で王妃となる事をわしの縁者はこぞって勧めておる。わしの心はたいそうそれを望んでいる」。(241)

ウァテは怒って語った、「殿にそのような事を申した者は、私が今日のうちに死んだとて別にくやまないでしょう。私が美しいヒルデを連れてくることが出来ると、テネマルケのフルオテ以外に誰も殿にけしかけはしなかったでしょう。美しい娘は守られています。彼女はたいそう美しい、と言ったホーラントとフルオテと私が殿のためにこの仕事を引き受けることを決心したと、殿がおわかりになるまで私は心落着きません」。(242, 243)

ヘテレはただちにホーラントとフルオテのもとへ使者を送ろうとした。王のために宮廷へ赴くようにと、彼の友人の多くに告げ知らされた。ヘテレとウァテはこれについて二人だけの話をこれ以上しなかった。(244)

勇猛なるウァテがホーラントとフルオテに会った時、直ちにこう語った、「そなたたち二人の勇者がしばしばわしの誉れとわしの宮廷参上に注意を払っていることで、神がそなたたちに褒美を与えて下さらんことを\*！わ

\* このウァテの言は皮肉である。

しが使者となることにそなたたちはずいぶん骨折った。さてそなたたちもわしとかの地へ赴かねばならぬ。わしは王の恵にあずかるために王に仕えねばならない。わしの休息を危くする者は同じ危険をわしとともに耐えねばならない」。(245, 246)

そこで勇者ホーラントは言った、「私は喜んでそこへ赴きましょう。王が私に許してくだされば、美しい婦人たちを見るところで辛苦を厭おうとは思ってはいません、私と私の<sup>やから</sup>族に誉れ高い喜びが起らんがためには」。(247)

「我々は」フルオテ殿が語った、「旅に700名の武士を連れて行かねばなりません。ハゲネ殿は誰にもいかなる誉れをも与えません。彼は度量が広くないので、我々に力をふるおうとする時には、尊大さを忘れてしまうにちがいありません。殿、上等の糸杉で、殿の家来たちが耐えられるほどの、海を渡るための船を作るよう御命じになって下さい。マストに銀白色の腕輪を打ちつけて下さい。携えねばならぬ食糧の事をお考えになって下さい。我々がここから付けていく兜と堅固な鎖鎧を念を入れて作らせて下さい。それで勇猛なハゲネの娘を一層容易に手に入れられましょう。甥のホーラントは、賢い男ですから、きっと小間物屋の店先に立つでしょう。私は彼にその事を許しましょう。彼は婦人たちに腕輪、黄金、宝石を売りましょう。それで我々は一層信用されましょう。我々は武器と売り物のために衣裳を携えねばなりません。ハゲネの娘を手に入れるために戦おうとしないならば、誰も彼女を得ることが出来ないぐらい、彼女を手に入れることはまことに危険であるが故、まずウァテ殿を選んで下さい、彼が誰を我々と赴かせたいと思っているにせよ」。(248, 249, 250, 251, 252)

そこで老ウァテが語った、「私には商売の心得がありません。私は今まで持物を寝かせておいたことはありません、いつも勇士たちと分けあいました。これが今も私の考えです。宝物を美しい婦人たちにもたらすほど、私には才がありません。甥のホーラントが私にこの事を勧めるが故、彼はハゲネがどんな男であるか、よくわかっています。ハゲネには26名の

勇士ほどの力があります。彼が求婚の事を耳にすれば、我々は這々の体でそこから立ち去らねばならぬでしょう。殿、急ぐように命じて下さい。我々の船を床板でおおわねばなりません。勇猛なハゲネが和平を破り、我々を追撃させようとした時、我々が戦うのを助ける立派な勇者どもがその下にいっぱいひそんでいなければなりません。少なくとも100名の勇者が武器に身を固めて、ここからイルラントに向かわねばなりません。一方甥のホーラントは200名の武士たちと小間物屋に居なければなりません、そうすれば美しい婦人たちは彼のところへやって来ましょう。その上、立派な三艘のコッケ船\* が作られねばなりません。馬と食糧を我々の傍に積まねばなりません、一年たっても不自由しないように。我々はハゲネに言うでしょう、辛じてステュルメンの地から逃れて来たと、そして我々はヘテレ王の勘気を蒙ったと。大層の贈物をもって我々はしばしばヒルデとハゲネのいる宮廷へ赴かねばなりません。さすれば王と我々との仲は確固となりましょう。我々が追放の身であることを言わねばなりません、さすれば直ちに勇猛なるハゲネは私に憐れを抱きましょう。我々他国の客に宿があてがわれましょう。ハゲネ殿は我々を己が国で飢えさせはしないでしょう」。

(253, 254, 255, 256, 257, 258, 259)

ヘテレは勇士どもに尋ねた、「わが友よ、そなたたちがここから旅立つのはいつになろうか?」。彼らは言った、「冬の後には夏が来れば、衣食を身につけて、再び宮廷にやってきましょう。その間に、必要なものが、帆と櫂が念入りに作られましょう、そして我々に伴うコッケ船とガレー船\*\*も、大波によって損害を蒙らないように作られましょう」。(260, 261)

ヘテレ殿は言った、「さあそなたたちの国へ戻るがよい。そなたたちは馬や衣裳に金をかける必要はない。そなたたちに従うすべての者にわしは鎧兜を与えよう、どんな婦人たちもそなたたちを立派だと思ってながめて

\* 幅の広い船、荷物船

\*\* 舷の低い船、細長く速く走る。



くれるように」。 (262)

そこでウァテは許しを得て又ステュルメンへ駒を進めた。ホーラントとフルオテは直ちにテネマルクに立ち帰った。彼らはその殿であったがためである。彼らはヘテレに仕えることを止めまいと考えた。(263)

国でヘテレは己が考えを明らかにした。大工どもは大層いそがしくなった。彼らは出来るだけうまく船を作った。船の継ぎ目は銀ではられた。

(264)

帆柱はしっかりと堅固につくられた。舵には輝く黄金が炎のように赤く塗られた、王は権勢高かった。彼らが出発することになった時、彼らは誉れ高く出発の身支度をした。(265)

錨索\* は遠くアラベール（アラビア）からもたらされたものだ。これほど上等なものは決してどこにも見られなかったであろう。それだけに一層快適に彼らはヘゲリングゲンから深い波間に進んで行った。(266)

そこで朝早くから晩遅くまで帆が織られた。王はそれを急いで作るように命じた。帆を織るために彼らが見つけたアバリー（不明、アラビアのどこかかもしれない）産の絹の上等品が選ばれた。彼らはこの頃には休むことなく働かねばならなかった。(267)

上等の銀で錨を作るなど、誰が信じ得ようか。王の昂ぶった心は高きミンネを求めている。王がそれを急ぎ始めた時、多くの家来どもを大いに立ち働かせた。(268)

船には荒天と戦いに備えて床板が張られ、梁がかけられていた。美しい婦人たちのところへ赴こうとする若者たちの許にただちに使者が送られた。但し王が完全に信用している者以外は呼ばれなかった。(269)

\* アラビア産である以上絹製と推測される。

ウァテはステュルメンからヘテレの城へ馬を駆った。彼の馬は銀と衣裳をたいそう積んで歩を進めた。彼には400名の武士が従った。優れたるヘテレはたいそう勇ましい客どもを迎えた。(270)

勇ましい男ホーラントはテネマルケからそこへ馬を駆った。進んで役目を引き受けようとする千あるいはそれ以上の使者たちをヘテレは得た。彼がかくも権勢高くなかったら、そんな事はなせなかったであろう。(271)

勇士モールクはフリエセンから馬を駆って来た。彼は200名の武士を従えた。彼らが兜と鎖鎧を付けてやって来たことが王に知らされた。直ちにイーロルトもやって来た。まさしく彼らはヘテレの一門であった。

(272)

ノルトラントのイーロルトは旅立ちの用意が出来ていた、王は彼に衣裳を与えなかったが。彼の家来も彼もどこへ向かうにせよ、貯えが出来ていて、誰にも少しも乞わなかった。(273)

王は王にふさわしく、彼らすべてに会釈した。王は愛想よくイーロルトの手を握り、老ウァテが腰を下ろしているところへ行った。今や勇士たちが分別をもってこの地をあとにする前に、彼らが携えなければならないものが十分に調っているか、注意が到る所で払われた。勇士たちは、自分たちの乗る船が立派であるのを見た。王は使者たちを美しいヒルデの許へ如才なく遣わした。(274, 275)

二艘の新しい、堅固で立派なガレー船と二艘のコッケ船が岸に付けられていた。そしてこの国の波間で誰も今まで見たことのないような上等の主船が。(276)

彼らはそこから出発せんとした。彼らの馬と衣裳は船に積まれていた。ウァテはヘテレ王に忠告した、彼らはすべて王に喜んで仕えようとしているが故に、彼らが戻って来るまでに、心晴やかになっているようにと。

(277)

王は沈んだ面持で言った、「ここからわしのために危険をおびて赴く若者達に注意を与えてほしい。日々のそなたたちの誉れによるそなたたちの助言を若者達に与えてほしい」。(278)

ウァテは王に言った、「航海がどうであれ、誉れが得られるということなどないと思わないように、ここでふるまって下さい。我々の財産を守って下さい。若者達には私の助言は行き届いております」。(279)

勇ましいフルオテはその時宝物殿を管理していた。そこには金、宝石、そして多くの宝物が横たわっていた。王は自分に求められたらこれを喜んで行なった。フルオテが宝の一つを望んだ時、王は彼に三十個を与えた。  
(280)

戦いが必要となった時、奸計で乙女を手に入れるため船の中に潜むことになっている 100 名の武士が選ばれた。王は彼らに喜んで多大の宝物を与えた。(281)

あらゆる階層の人々が彼らを見送った。騎士と侍臣、34名の武士たちが。あたかも彼らが彼らの国を辛苦を負って後にしたかのように。ヘテレは勇士たちに言った、「汝たちに天の神の御加護があらんことを」。(282)

ホーラントは王に言った、「殿が心配なさはありません。我々が再び戻ってくる時には、美しい乙女をながめることが出来ましょう、彼女を殿は手に入れることになりましょう」。王はこれを喜んで聞いた。その時まだ彼らの帰郷はほど遠いものであった。(283)

接吻をして彼は多くの武士たちと別れた。若き王は彼らの辛苦を思って悲しんだ。彼は始終彼らの事を気づかった。王はその性格から彼らがいなくてはすまされなかった。(284)

北風が勇士たちの心に従って帆を動かしたのは幸いであった。船が岸から離れた時、滑らかに進んだ。航海の苦しさをわきまえている者たちは、

未熟な者たちに教えた。(285)

我々は伝えることも、語ることも出来ない、彼らが36日の間、海のどこで夜を過したかを。若者たちはすべて杖を手にして互いの助力を誓いあった。(286)

彼らの意志がいかようであろうとも、荒れた海では折々彼らの不快は苦痛なものであった。かたわら出来る限り彼らは休息をとった。海にいる者は、不快ながらも死をまぬがれるにちがいない。(287)

波が彼らをバルヤーンのハゲネの城までほぼ千マイル運んだ。語られるのを聞いているように、ハゲネがポーラーンで君主として恥さらしに暮しているとは、馬鹿げた偽りである。そのことは言い伝えとも合わない\*。  
(288)

ヘゲリングエンの者たちがハゲネの城下に到着した時、彼らに注意がひかれた。波が彼らをいかなる王国から運んできたか、人々は皆知ろうとした。彼らが上等の衣裳で着飾っていたからである。(289)

彼らはただちに錨を海底に下ろした。帆もすぐにおろされた。他国の人々がやって来たという事が、ハゲネの城に伝えられるまでには長くかからなかった。(290)

彼らは船から降り立ち、岸に品物を運んだ。必要とされたもの、望まれたものは何でも、そこに売られていた。彼らの品は大層豊富であった。だがたとえいかに多くのお金があっても、すぐには買い物はなされなかった。(291)

岸に商人風のいでたちの60人あるいはそれ以上の立派な男たちが立っているのが見られた。その中に先達のテネマルケのフルオテがいた。それに彼はほかの者よりも上等の衣裳を身に付けていた。(292)

\* 作者はここでクードルン伝説のほかの伝承に反対している。

バルヤーンの城から役人が、かくも豊かな者たちがやって来たが故に、市民たちと共に、賢い商人たちのいるところへ馬を駆って来た。彼らは出来るだけ商人風にふるまっていた。(293)

役人は、彼らが海を渡ってどこから来たのか尋ねた。「お話しいたしましょう」勇士フルオテは言った、「わしらの国は遠くです。わしらは商人ですし、船の中に権勢高い貴族たちがおられます」。(294)

ウァテ殿は国王と条約を結ぶことを願った。彼の力が及ぶ者には、彼は厳しい人であることが彼の堂々とした物腰で見てとれた。客たちは彼らの願いの報告と共にハゲネ王のもとへ連れていかれた。(295)

ハゲネは言った、「彼らの自由と安全を彼らに伝えさせよう。他国の者を侮辱する者は縛首にされよう、それ故彼らは案じなくともよい。わしの国では彼らに何も妨げになるものはない」。(296)

彼らはそこで王にほぼ千マルクの価値の宝物を贈った。彼らが売り物にしていた、騎士たちと婦人たちとにふさわしいもの以外には、彼は一ペーニヒだって欲しなかったであろう。(297)

ハゲネ殿はたいそう感謝した。彼は語った、「わしがもうあと3日生きれなくとも、そなたたちがわしに贈り物をした事で、客人よ、そなたたちは償われよう。そなたたちに不自由があれば、わしは生涯とがめられよう」。(298)

王は、彼の前に運ばれたものを分配した。その中に、美しい婦人たちが気に入りそうな腕輪があった。立派な帯、髪飾り、指輪を王は慎重に分けた。(299)

このような豪華な贈物がこの王国で商人たちから決して贈られたことがなかったことを、ハゲネの妻も娘もよく知っていた。ホーラントとウァテは贈物を今初めて宮廷へ届けた。(300)

最高と思える立派な60反の絹織物と黄金が織り込まれた40反の絹織物が岸に運ばれた。ここでは色付きの絹織物とバグダット産の絹織物はつまらぬ物としてみなされていた。彼らは、彼らの国で最上と思える百反の亜麻布を贈った。(301)

宮廷へ運ばれた絹織物の質に応じて、立派な裏地が張られた。それらは40あるいはそれ以上になった。名声を得ることが必要となれば、贈物によって名誉を得なければならない。(302)

その上、鞍を付けた12頭のカステューリャ産の馬が運ばれた、そして上等の幾つもの鎖鎧と兜と、それに黄金で塗られた12個の楯が運ばれた。ハゲネ王の客たちは物惜しみしなかった。(303)

ホーラントと勇猛なイーロルトは贈物を持って宮廷へ騎行した。王に進まれた——今一度王に客の事が知らされた——彼らがある国の貴族たちであると。それは贈物から明らかであった。(304)

彼らと共に、彼らが引き連れて来た24名の武士も宮廷へやって来た。彼らは立派な姿をしていた。ハゲネの家来たちがこれを見ようとした時、彼らがその日に騎士に列せられることになっているかのような衣裳を身に付けていた。(305)

一人の者が王に言った、「殿、贈られた多大な贈物をお受け下さい。客人に相応のお返しをして下さい」。王はどんなに富んでいても、彼は客人に丁重に礼を言った。(306)

彼は語った、「当然の事故、彼らに喜んで感謝しよう」。宝物蔵の番人たちがそこへ赴くように命ぜられた。彼らに衣裳を一つ一つ調べさせた。彼らがそれらを詳しくながめた時、彼らは贈物のすばらしさに驚いた。

(307)

そこで宝物蔵の番人の一人が言った、「殿、申し上げます。ここに豪華

な宝石で飾られた金と銀のうつわが置かれています。彼らはたしかに殿に 2 万マルクほどの価値の贈物をしています」。(308)

王は言った、「客たちに幸あらん事を！ 今やわしは家来たちに贈物を分けようと思う」。王は彼ら総てに、彼らの望みとするものを与えた。王は思い通りに銘々に与えた。(309)

王は、二人の若者、イーロルトとホーラントに自分の傍に坐るように言った。彼は尋ねた、彼らがどこからこの国へやって来たのかを、「なぜならかくも豪華な品を献上した客はいなかったから」。(310)

そこで勇者ホーラントは語った、「それを申し上げます。殿、殿の情にすがって、訴えねばなりません。我々は祖国から追れた身なのです。権勢高き王が怒りを我々に向けたのです」。(311)

そこで奔放なハゲネは言った、「その者のためにそなたたちが城と国から去らねばならなかったその者は何という名であるか。その者が賢明であるならば、自分のところに置いておきたいほど、そなたたちには才があるとわしには思える」。(312)

彼は尋ねた、その者のために追放されて、他国へ逃れて、苦難している、追放したその者の名は何というのかと。勇者ホーラントは語った、「その名をきっと申し上げます。彼の名はヘゲリングの国のヘテレと申します。彼の力量と勇氣と腕はたいそうなものです。彼は我々から多くの喜びを奪いました。そのため一層我々は心悲しんでいます」。

(313, 314)

そこで奔放なハゲネは言った、「そなたたちに運が向いてきた、彼がそなたたちからとりあげたものが、完全に償われるであろう。わしに財がないのでない限り、そなたたちはヘゲリングの王に彼の財を決して乞うべきではない」。(315)

彼は語った、「そなたたち勇士がここでわしの許に留まろうとする気持

があれば、そなたたちに封土を授けよう、ヘテレ王がかような誉れをそなたたちに与えなかったのとはちがって。彼がそなたたちから取り上げたものを、十倍にしてそなたたちに与えよう」。(316)

「喜んで殿の許に留まりましょう」テネ（デンマーク）のホーランドが言った、「ヘゲリンゲのヘテレが、我々がこのイルラントにいるのを知ることを、我々は恐れております——なぜならイルラントへの道を彼は知っております故、——わたしは常に憂いております、彼が我々を生かしておかないことを」。(317)

王ハゲネは彼らに語った、「そう決めて、憩うがよい。ヘテレ殿がそなたたちを痛めつけるためにこの国へそなたたちを探しに来ることは決してすまい、そんなことになればわしは大いに恥をかくことになるう」。(318)

彼は彼らにただちに城下の宿をあてがえた。猛しいハゲネは己が市民に命じた、出来るだけ彼ら客人に誉れを与えるようにと。船旅に疲れた勇士たちがゆったりとくつろいでいるのがしばしば見られた。(319)

町の人々は王の頼みを聞き入れた。40あるいはそれ以上の立派な家々が——人々は喜んでそうしたのだが——テネラントの者たちのために明け渡された。町の人々は己が家から出て行った。(320)

テネラントの者たちは町へ夥しい品を運んだ。船室に潜んでいた者たちは、美しいヒルデを手に入れることになれば、喜んで激しい戦いに挑もうと、しばしば考えていた。(321)

王は彼の高貴なる客たちに尋ねるように命じた、彼らが王から封土を与えられるまで、ずっと客分でありたいかどうかと。そこでテネのフルオテが言った、「そんなことをしたら我々すべての恥となりましょう。ヘテレ王が我々を当然ながら優遇し、我々が多大な富を得るならば、我々は心よく思うでしょう。そのためなら大層の空腹だってこらえましょう」。(322, 323)

フルオテは彼の店に屋根を張るように命じた。品物が一日で売り切れて



しまうほど、これほど高価な品がこんなに安く売られたことなど、近隣の国では前代未聞であった。(324)

望んだ者は宝石も金をも買った。王は客人たちにたいそう親切であった。買わずに彼らの贈物のいくらかを望んだ者に、彼らは親切にもやってしまう心積りでいた。(325)

だがこの勇ましい男たち、ウァテとフルオテが行った事、さらに彼らの気前のよさを、誰もが信じようとした。彼らがたいそう誉れを得ているとの事は宮廷の美しい婦人たちに伝えられた。(326)

貧しい人々がこの二人の衣裳を身に付けているのが見られた。財をすっかり消費して負債のある者には、しばしば抵当が免除された。若い王女は侍従たちが彼らの事をしばしば話しているのを耳にした。(327)

彼女は王に言った、「いとおしいお父さま。あなたの高貴な客人たちを宮廷へ参じさせて下さい。そこには立派な心意気の方がいらっしゃると聞いております。そうであれば、私は時折その方にお会いするのが楽しみとなるんですが」。(328)

王は乙女に言った、「きっとそういうことになるろう。その者のふるまいをそなたに見させてやろう」。まだその時ハゲネはウァテを見知っていなかった。婦人たちが老ウァテの立居振舞を見るまで、彼女らは待ち遠しかった。(329)

王は客人たちを招き召した、彼らに必要なものが乏しければ、宮廷へ参じ、食事を楽しむようにと。テネのフルオテはこれを勧めた。この者は勇ましく、かつ賢明であった。(330)

テネラントの者たちは、宮廷へ赴くために、あわただしくしていた、誰も彼らの身なりを咎めだてしないようにと。ステュルメンからのウァテの

供も同様であった。まさしくウァテは立派な武士とみなされるに値した。

(331)

モールンクの家来たちは上等のマントと、カンパリーエ\* 製の上衣を身に付けていた。上衣の上には宝石まじりの黄金が炎の如く赤く輝いているのが見られた。勇者イーロルトは一人では宮廷へ赴かなかった。(332)

勇士ホーラントより立派な衣裳を身に付けている者がいると誰もいいはらなかつた。彼とその供が広くて長いマントを着ているのが見られた。それらは明るい色であった。これら勇ましいデーネ人たちは意気高くやって来た。(333)

ハゲネ殿は権勢高く、心意気高かったとはいえ、彼らを出迎えた。王妃はウァテを見た時、椅子から立ち上がった。彼は冗談も言いそうにない真面目な様子をしていた。(334)

彼女はいんぎんに語った、「ようこそお越しになりました。あなたがた勇士が戦いによりたいそううちひしがれていると、私も王も聞いております。王は王の名と誉れにふさわしくあなたがたをもてなすでしょう」。(335)

彼らはすべて一様に彼女にお辞儀をした。彼らは礼儀にかなっていた。普通客にそうするように、あらゆる国の王の城にはあるであろう最高の酒が彼らに運ばれてきた。(336)

彼ら一同は冗談を言って腰を下ろした。あてなる王妃は広間を去った。その際彼女は剛なるハゲネにたのんだ、勇者たちから話を聞くために彼らを自分の暖かい部屋へ入れることを許してくれるようにと。(337)

語られているように、王はこの事をただちに約束した。若き王女にとってそれは喜ばしかった。そこで彼女とその侍女たちは黄金と衣裳で身を飾るのに夢中であった。他国の人がいかにふるまうか、彼女たちは見ることを望んだ。(338)

\* フランスのジャンパーニュ地方とも考えられる。

今や老ヒルデが娘のそばに腰を下ろした時、美しい乙女たちはたいそう気遣った、そのような衣裳で、それぞれの乙女が王女であると言われやしないかと。(339)

老ウァテは若きヒルデのところへ赴くように勧められた。彼が老いているとはいえ、彼女は乙女らしい気持で彼から身を守らねばならないと思った。若き王女はウァテをしとやかに迎えた。(340)

彼女はまっ先にウァテを迎え入れた。彼女が彼に口付けをしなければならなかったならば、彼女は恐らく不快であったろう。彼の髭は広くはえていた、髪はたいそう立派な飾りで巻かれていた\*。彼女はウァテとテネマルクのフルオテに腰を下ろすよううながした(341)

彼女らの座席の前には立派な男たちが立っていた。この者たちは礼儀を心得ていて、かつては多くの戦いにおいてみごとに多くの戦功をたてていた。この勇士たちは称えられた。彼らに誉れ高く名誉が与えられた。(342)

ヒルデと彼女の娘は、冗談めかしてウァテに尋ねた、彼がこうして美しい婦人たちのそばに腰を下ろすことになった時、それは彼に結構な事に思えるか、あるいはむしろ激しい戦いにおいて戦いたいかと。(343)

そこで老ウァテは語った、「あとの方が私には喜ばしい事です。私は今まで美しい婦人たちの傍でこんなに心地よく腰を下ろしたことはありませんから、立派な騎士たちと多くの激しい戦いで戦う方が私には好ましいことです」。 (344)

麗わしい乙女はそれを聞いて声高に笑った。彼が美しい婦人たちの傍にすることが苦痛であることを彼女は知った。そのため彼女らはこの部屋で大いにウァテをからかった。それから王妃ヒルデとその娘はモルンゲの家来たちと話をした。(345)

\* これは北ゲルマン人の風俗である。

王女は老ウァテのことを尋ねた、「あの方は何とおっしゃるんですか？どこかで民，城，国をお持ちなんですか？ 城に妻か子供がいるのですか？ 彼は国で妻や子供を愛していらっしゃらないと思いますわ」。(346)

そこで勇士の一人が語った、「彼の国に妻と子供がおります。誉れを得るためには財産と生命を彼は賭します。その事ははっきり知れています。彼は今までもすでに勇ましい武士でした」。(347)

イーロルトはこの勇ましい男について語った、いかなる王も己が国でかように勇ましい武士を今まで家臣にしたことがなかったことを、「彼がいかに温和に振舞っても、名高きてだれの勇士です」と。(348)

王女は語った、「ウァテ殿，お勧めいたしましょう。ヘテレ殿があなたがたをテネマルケから追い出したが故，ここに留まって下さい。あなたがたをここから簡単に追い出すことが出来るような力のある者は誰もいません」(349)

彼は王女に言った、「私自身国を持っていました。その頃私は与えようと欲した人に，馬と衣裳を与えました。今や私は仕えて生活の糧を得なければならぬなら，いやいやながらもそうするでしょう。私は親から受け継いだ土地なら決して一年中離れないでしょう」。(350)

王はいつも彼らに多大な財を与えた。この勝れた武士たちは誰からも一マルクだに貰おうと欲しないほどの気であった。ハゲネ殿は権勢高かった。それで彼らの誇りが激しく彼を傷つけた。(351)

彼らはそこから立ち去った。美しいヒルデは，彼らが宮殿で婦人たちの傍にいつでも腰を下ろしてもよいと，言った。それは彼らに恥とはならないであろう。そこで勇士イーロルトが言った，「私の国でも同じように我々は扱われます」。(352)

彼らは王の前へやって来た。そこには多くの騎士がいた。そこで騎士た

ちが夫々様々な競技を行なっているのを、彼らは見た、台の上でチェスを、楯の下で闘を。彼らは剛しいハゲネに取りつくろわずに振舞っていた。

(353)

イルラントの流儀に従って、おおいにしばしば様々な余興がなされた。それにより、ウァテは王と親しくなった。テネリーヒェのホーラントは婦人たちの為に、しばしば冗談を言っているのが見られた。(354)

ウァテ殿もフルオテも、勇猛果敢なる武士にて、ほとんど同じほどの年配であった。二人の灰色の巻き毛は黄金の飾りで巻かれていた。勇者が必要とされる場所では、彼らはまことに武士らしいと見なされた。(355)

王の家臣が宮廷へ、楯、棍棒、それに中高の付いた大楯を運んできた。それで充分に身を防げた、刀で戦い、投槍で激しく立派な楯を射れた。若い勇士たちは倦まなかった。(356)

王ハゲネはウァテとその家臣たちに尋ねた、このイリーヒェ（イルラント）で勇士たちが行なっているが如く、彼らの国でもこのような激しい剣術が行なわれているかと。ウァテはこれを聞いて軽蔑して微笑んだ。(357)

シュテュルメンの勇者は言った、「こんなことを私は見たことはありません。それを私に教えてくれる人がおれば、それをうまくこなせるまで、丸一年だってここにいましょう。その師に私は喜んで礼をいたしましょう」。(358)

王は客に言った、「そなたのために、指南役をそなたに付けよう。どこであれ激しい戦いにおいて、そなたが敵に三撃をくらわすことが出来るように。それはきっとしばしばそなたの役に立とう」。(359)

そこで剣術指南役がやって来た。いと勇ましいウァテに彼は術を教えた。これにより指南役は身の不安を感じた。ウァテは、あたかもてだれの戦士の如くに、身を防いだ。これを見てテネのフルオテは笑った。(360)

ウァテが、あたかも野生の豹の如く、かなたへ躍びのいたことは、剣術師には好都合であった。ウァテの手にした立派な剣がたいそうしばしばうなりをたて、双方の盾から火花がとび散った。それがため師は弟子を褒めねばならなかった。(361)

そこで勇猛なハゲネは言った、「剣をわしにかしてくれぬか。ステュルムラントのこの勇者がわしに礼を言うほど、わしの剣の数撃を教えることが出来るかどうか、わしはこの者と相手がしたい」。そこで老ウァテはただちにこれを称えた。(362)

客ウァテは王に言った、「ハゲネ殿、殿が私を毘にかけないように、殿から約束をいただかねばなりません。殿が私に傷を負わせるなら、私は婦人たちの前で恥をかくことでしょう」。ウァテが防ぐことが出来たとは、この世で誰が信じ得たであろうか。(363)

ハゲネはこの如才のない男に業を煮やした。それがため水をかけられた火のように湯気立った、弟子の前でこの師は。まさにウァテは恐ろしく力強かった。王も客に強烈な打撃を与えた。(364)

人々は、彼ら二人が力強かったが故、喜んでこれを見ていた。王はすばやくウァテの力量を知った。彼の誉れが傷つけられたなら、大いに怒りをあらわしたであろう。ハゲネはさらに一層力をあらわしたであろう(365)

ウァテは王に言った、「我々二人の試合を容赦なく行ないましょう。今や私は殿から数撃を受けました。それに喜んで礼を申しましょう」。彼はまもなく猛しいザクセン人\* やフランケン人\* の如くに王にひどく報いた。(366)

二人は試合をやめなかったので、打ち合いの音が鳴りひびいた。彼らが別々に異なった相手と闘ったとしても、勝利を収めたであろう。両方の剣の柄が飛びちぎれるほど、闘は激しかった。(367)

\* 外敵の総称として用いられている。

彼らは席に付いた。王は客に言った、「そなたは学びたいと言うのか？ 実にわしはこれほどの者を見たことがない、このような腕前を身につけるなら、その者の弟子に喜んでなろう。試合がなされるところでは、そなたは称えられよう」。(368)

イーロルトが王に言った、「殿、殿は自分を試されたのです。我々は我々の主君の国でこんな試合を見てまいりました。それを我々の習わしとしています。武士も小姓も毎日それにいそしんでおります」。(369)

そこでハゲネが言った、「わしがそれを知っていたら、武器を手になかったであろう。弟子がかくも早く技を会得することを見たことがない」。この話に多くの高貴な母の子たちは爆笑した。(370)

そこで王は客人に、気ままに時を過すことを許した。ノルトラントの者たちはまもなくこれに従った。退屈を感じたので、彼らは石を投げたり、槍を射たりした。(371)

付記：今回からは各節ごとに訳出した、但し会話体が完結していないところ、あるいは Enjambement の部分は連続して訳した。